わ た し の ６ ０ 年

― 交通局から紡績会社、そして議員に ―

大阪府・元枚方市議会議長・牧 田 アヤ子

―これは、牧田アヤ子さんが 81 歳の時、2009 年 1～２月に、枚方市・枚方市教育委員会・ひらかた人権委員会が実施した講座「生きること」での講演録です。―

皆さん、こんにちは、牧田アヤ子です。本日はお忙しい中、わざわざお出ましをいただきまして大変恐縮に存じます。

幼 い 頃

私は、昭和３年、鹿児島の薩摩に生まれ、私が小学校１年生の時、母が一番下の子を産んでから５日後に亡くなりました。女６人、男４人の１０人兄妹に生まれ、私は女の子の４番目です。小さい時、母を失い、子供たちだけで大きくなってまいりました。いずれにしても、小さい年頃の子供ばっかりで、しかも乳飲み子を抱えていましたので、私たちの面倒を見てくれる人は、どなたもありませんでした。母親がいないんだから兄妹は仲良くして、いつも父は「自分のことは自分でしなさいよ」と兄妹みんな順番に「大きい人から小さい子まで、みんなで面倒を見なさい」と、やかましく言っておりました。おかげさまで、こんなに大きくなりました。

先ほど、枚方で初めての女性議長とご説明いただきましたが、もともと私は小さい頃から男勝りの活発な女の子でした。小学校のころは、いつも小さい弟を学校に抱いて行きました。昔はとても親切な先生ばかりで、女の先生がいつも休憩時間になりますと「もっと遊んでいらっしゃい、子守をしてあげるから」といって、小使いさん（校務員さん）のお部屋に連れていってもらい、黒砂糖をもらったりして、ゆっくりと遊ばせていただきました。

そんなことで、私たちは母親がいないからといって、メソメソしたりしないで、スクスクと大きくなったような気がします。そのころのお話を申し上げますと、５歳のころからすでに男勝りでございました。木登りが得意なもんですから「木登り特兵衛（トクベイ）さん」とか「トクベイさん」というあだ名がついておりました。

そしてまた、だれに習ったのかわかりませんが、泳ぎもわりと上手だったんです。それで、みんなに「オケラ、オケラ」といわれました。オケラというのは、田圃でスイスイと泳ぐ虫なんです。「オケラさん」「トクベイさん」と言われて大きくなったような気がいたします。

いずれにしても、小さい時からのおてんば娘で、いつもみんなで遊んでいると私が中心にいたような感じでした。そうしている間に、二人の姉が働きに出まして、私たち兄妹４人、あとは兄が１人だけ家に残っておりましたので、父も含めて６人で暮らしていました。昔はご飯を誰が炊くかということでも、いろんな心配をもしました。今のように電器釜はなく鉄釜です。鉄釜をおくどさんに置いて、バケツに水を汲んで、それから米を洗って、水をここまで（手首）と聞いてたから、そこまで入れて、薪で炊きました。今考えたら楽しかったんですね。そのころ、米が１円５０銭ぐらいでした。皆さんは「さぞかし、辛かったんでしょう」とおっしゃいますが、あんまり辛いとは思いませんでした。大きくなったら辛いことも懐かしい思い出になる、そんな感じでした。

日紡の津守工場

小学校を出る頃、近所のお姉さんが田舎に帰ってこられました。その方は、日紡の津守工場で働いていて、田舎に一時帰郷をされていたんです。私は、兄妹も多いし大変だからと思って、自分で紡績に行くことを決めました。そして、そのお姉さんに「連れていってほしい」とお願いしました。昔は「募集人」という人がいまして、紡績に行くのは募集人さんが連れていったんですが、募集人さんがいないんで、お姉さんに連れていってもらいました。時々、思い出して笑うんですが、大阪に働きに行くのにお父さんがモスリン（ウールの薄手の平織りの織物）の大きい椿の花の着物を作ってくれました。下駄を履いてトランクを提げて、下関と門司との間はまだ連絡線でしたから、１３歳の子供がトランクを提げて着物を着て行くというのは、今、考えますと漫画ですね。途中で一泊して、３２時間もかかって大阪までたどり着きました。

私が、日紡津守工場に入った時には、とにかく、あまり会社が大きいのでびっくりしました。そこには１５００人くらいのお姉さんや小さい少女の方がいらっしゃいまして、事務所には寮母さんがいて、外出も１ヶ月に１回だけでした。会社が辛いからと言って逃げたまま帰って来ない人を「逃亡」と言ってました。そんな時には部屋全体に罰が当たります。連帯責任で２ヶ月間外出禁止です。お金もないから外出しなくてもいいんですが。

しかも、各寮には「寮母さん」というお姉さんたちが住んでおられました。私たちも「先生」と呼んでいました。何もかもその先生の言うことを聞かんといかんのです。「寮監さん」とも言いました。たぶん、そのころの「女学校卒業」のお姉さんたちだったと思うんです。外出するときも、前もって申し出て、先生の部屋にいってお座りして「恐れ入りますけれども、外出をさせていただきたいんですが」と許可をいただいて外出する。それも月に１回だけなんです。

会社の中でいろいろと勉強をさせてもらいました。まず入社した時に工場見学をさせていただくんです。工場に行きましたら、私のような小さい若い方がいっぱい、綿ぼこりの中で働いていらっしゃいました。あまり綿が多くてびっくりしました。全部が綿なんです。この綿はインドネシアから輸入されたもので、綿から糸をつくり、糸から綿布を織るところだと聞きました。

夏には部屋の温度は４０度ぐらいになります。冬でも３８度とか３９度になります。そして、木綿を「シューッ」とスプレーみたいな蒸気で移動させるものですから、体じゅうに綿がいっぱいに付くんです。それを取るにはスポンジを水に濡らして、こするように取るとうまく取れるんです。だから、スポンジは離せない商売道具の一つでした。

会社は、全寮制ですから、当然みな寮生です。２交代で、早番は朝４時に起こされて、遅番は１０時に仕事が終了で、綿を払って帰ったら１１時になるんです。それから洗面器持って風呂に入って寝る時間は１２時です。これを「深夜業」と言いました。早番は朝４時になると「皆さん、ただいま４時です。お目覚めのお時間です」といって起こされます。

そして、４時から５時までの間に職場に入らんといけないのです。４時半になったら食堂が開くので食堂でご飯を食べる。ですから、生活がすべて会社の中です。大きな塀に囲まれていて、最初は刑務所かと思ったくらいです。本当に高い囲いで逃げないようにしてあるんです。そして、その外には大きな濠を作って、さらに柵がしてあるんです。当時の紡績の業界というのは、みんなそうだったようです。だから逃げるといったら、どこか外出したまま帰って来ないとか、他の理由をつけて何とか出るんでしょうね。いずれにしてもひどいところでした。

私は、小学校卒業ですから、そんなに体が大きくなく、機械よりも私たちの方が小さくて、

機械と一緒に入ってしまうと、こういうような（縮こまった）感じに見えるくらいでした。そんなところですが、会社としては社員を外に出さないために、仕事が終わって工場から帰りに講堂に全員集めて一時間くらいお経を読ませたりしていました。

それから夕方５時にはご飯です。ご飯を食べた後は、青年学校に行きなさいといわれました。その他にブラスバンドだとか体育部のバレーボールだとか、いろいろありました。私は先ほど申し上げましたが、泳ぎが上手なので水泳部に入りました。水泳部に入ったといってもオケラが泳ぐんですから最初は我流で泳いでいました。そうしたら、コーチのほうから「自由形で泳ぎなさい。あんたは速いけれども格好が悪い」ということで、初めて正式に水泳を習いました。

そんなことで水泳も上手になって、その夏あちこちの大会に行きました。そうするとまた小さいからでしょうか、飛びぬけて速くて、いつも優勝したりして、大変にかわいがられました。大事にされて、仕事のことはあまり知らん間に過ぎました。夏になったら、昼の２時ごろからずっと泳いでいました。２年目の時には大阪の実業団の水泳大会にも出していただいて、そこで新記録を出し金メダルやいろいろといただきました。

ところが、ある日職場の先輩の人から「大変や、もうちょっとしたら会社がつぶれてしまう。閉鎖されるんやで」と聞きました。「えぇー」という感じでした。その時は「シナ事変（日中戦争）」が起こっていました。日紡津守工場というのは大阪の真ん中にあります。西成区の大きな工場ですが、やはり危険性を感じてか、その会社が「シナ事変（日中戦争）」で一番先に閉鎖になりました。

市電の車掌さんに

みんなと仲良く遊んで、水泳も応援してもらい、かわいがってもらっていたのに、みんながいなくなってしまう。これは大変なことだと、子どもながらも小さい胸を痛め、どうしようといろいろ考えました。ちょうど大阪に姉が住んでおりましたので、いっぺん姉さんに相談してみようと思い行きました。そして、行く電車の中で社内ずりの広告を見ていたら「大阪市電女子電車車掌募集、１６歳以上」って書いてあったの。「あっ、これにしよう」と思ってね。姉さんのところに「これからどうしよう」と相談に行こうと思ってたんですが、電車の中で「これにしよう」と決めてしまいました。

そうなると、今は寮生活をしているし、食事のことも困るし、１６歳の私にはとても一人暮らしができるわけがないということで、姉の家に行って相談しました。「車掌するんやったら、ここから通勤しなさい。同居したらいいわ」と姉の主人が言ってくれました。

「これはいいこっちゃ」と思って、喜んで会社に帰りました。

そして、寮母さんのところに退職願を書いて「すいませんけど、私も辞めさせていただきますんで、退職願をお願いします」というと、寮母さんはソロバンをはじきながら「アヤちゃん、あんたは他の人みたいに、私が勝手に退職願を受け取るわけにいかんのよ」と言われるんです。というのは、私は働いてきたわりには、仕事はしないで水泳ばかりして、たくさんのお金をつぎ込んできたというのです。ひょっとしたら「どこかに転勤でもさせようか」と思っていらっしゃったのかもわかりません。そんなことを言われて、とにかく私もびっくりして、どうして他の人は辞めたり転勤したりして行くのに、なぜ私の退職願は通らないのかと心配になり、お父さんに「私は紡績に売られた身でしょうか。退職願を出しても退職させてくれません」と書いたんです。

そしたら、父から一週間ぐらいして「あなたは決して紡績に売った子どもではありません。安心して帰ってきなさい。会社にも父から、よく退社のことについて連絡しておくから」と

便りがきました。それから２、３日してから、また恐る恐る寮母さんのところに退職願を持っていって「お願いします」って言ったら、父親も会社に便りを書いてくれていたので「はい、しょうがないね」ということで、ようやく退社をさせていただいたんです。

姉の家に「同居させてくれる」ということだったから、喜んで姉の家に、それこそトランクいっぱいぐらいの荷物を持って姉の家に入りました。同居してから４，５日したころに車掌の試験がありました。今の大阪の境川というところに大阪市電の交通局がございました。確か、試験はその２階であったような気がします。

紡績から外にでて初めてのことでしたが、その試験会場の交通局を訪ねていきました。ものすごくたくさんの人がいました。周りを見ると、みんな父兄同伴です。私は一人。しかも鹿児島出身の田舎者が一人ポツンといるわけです。ひょっとしたら場所を間違えたのかしらと思って、もう一度確認しました。

その当時は戦争中ですから、試験も戦争に関係する漢字など簡単な問題でした。午後から面接があって、夕方４時、合格した人は全部ここに残ることになりました。合格者は名前を順番に張り出されることになり、私は２４番でした。２０番ぐらいからハラハラしていましたが、２４番と書かれていて、やれやれと家に帰って報告しました。

帰る前に、皆さんに訓示があるということで聞きましたら「これから３ヵ月、教習所に行ってもらうけれども、毎日、お弁当を持っていらっしゃい」ということでした。お弁当を持ってこないと昼ご飯がない。そのころは、物価統制によってお米なんかも一人の割り当てが少なく、ほとんどみんなおかゆを食べるのが精一杯だったんです。家族の一人が弁当を持っていくなんていうと、これは大変なことで、みんなに迷惑をかけることになります。その説明があった時は、みんなも「フゥッー」と溜息がでました。私ももちろん溜息が出ました。

家に帰って姉に相談したら「まあ、３ヵ月のことやから私が何ぞ食べて弁当は作ってやるから心配せんでもいい、頑張っておいで」と言っていただきました。それで毎日、弁当持って行きましたが、時々、弁当を他人に食べられてしまうこともありました。「田舎者やから食べられたんかな」と思ったりもしました。最初の頃は２、３回続けて弁当箱が空っぽのときがありました。誰が食べたか教えてくれる人もいましたが、「あんた、私の弁当食べたね」とはとても言えませんでした。食べた人は、さすがに私のお腹が空くといかんからと、おでん屋に連れて行って、七輪で炊いているコンニャクだけを２、３個ほどよばれたことがあります。でも卒業する頃には、さすがにそんことはなくなりました。

市電では、まず停留所の名前を覚えないとあかんわけです。当時の大阪の停留所は３６０ヵ所ありました。それを全部覚えないといけない。当時は乗りかえ点で７銭だったと思うんですけども、乗りかえ切符を切らんといかん。そのためには、その停留所の名前を全部覚えないといけない。お客さんに言われて一生懸命見てやるんやけど、パッパと「どちらまでお越しでございますか」「はい」「この電車はどこどこまで行きますよ」と言いながら切らんといかんわけです。３ヵ月の間に覚えないと、十分に仕事ができないわけで、困るのは本人ですからね。

ようやく駅を全部覚えて、そうすると毎日試験があるわけです。どういう試験かというと、前の人が後ろの人の点数をつける、後ろの人が前の人の点数をつける。人が変わってつけないと、いいかげんにつけるということです。先生が３６０ヵ所の点検をするわけにはいきませんから、お友達同士でつけ合いをさせる。そういうのが済んで、さあ車掌になりました。うれしかってですよ。今日から「大阪で一番の模範車掌になってやろう」と思いました。姉さんに言ったら、「ハッハ」と笑いました。それから毎日、電車に乗って「毎度、ご乗車ありがとうございます」って言いながら切符を切ったり、停留所の名前をいっぱい言うと、お客

さんに「この車掌さん、ようしゃべる車掌さんや」と言われました。それでも乗りかえ地点が来たら、ちゃんと言わないと、お客さんが乗りかえないで座ったままでいたり、乗り過ごしたりされますから、一生懸命言っても別に悪いことはないんです。言うのが当たり前です。「大変長らくお待たせいたしました。この電車は野田阪神行きでございます。春日出方面の方はお乗りかえです。」というようなことをずっと言わないといけない。ボォーとしていたらお客さんにわからないでしょう。だから「ようしゃべる車掌さんやなあ」といわれました。

車掌の仕事も楽しい仕事で、時々、やんちゃなお嬢さんが乗ってこられて、目の前におるのに切符もきらさないで降りる時になって、私にお釣りをくれの何のと言って、やかましく言ったお嬢さんもいたりしました。そんな時には怖い顔をして、じっと睨んだりと、そんなこともありました。とても楽しい仕事でした。

女性初の市電運転手に

そのうちにだんだんと戦争もひどくなって、政府からも「電車の車掌とか運転手は、もう女性に換えなさい」という勧告がだされました。ある日、所長に呼ばれまして「牧田君、男の人が戦争に行っていなくなるんで、今度、女の運転手をつくることになったから君も教習所に行ってくれんか」といわれました。ちょうど１７歳の秋でした。運転手は１８歳からなんで「１７歳ですけど」と言ったら「卒業するころにちょうど１８歳になるからいい」という訳です。それで、秋になって運転士の教習所に行きました。そこではまず、運転士の心構え、それから、電車の電気の構造とか、そういうのを知らないと故障したら、どうにもならんから、そういうことを３ヵ月習いました。３ヵ月習った後では、また元の事務所に帰るんです。小さい声で「ただいま帰りました」って最初に言ったんですが、声が小さくて、モ一度やり直し。「女子電車運転手第一期生牧田アヤ子、ただいま帰りました」と、こう言うんです。なれてくると大きい声で言い過ぎて、今度は笑われます。運転士はたくさんのお客さんの命を預かるわけです。車掌みたいに「はい、発車チンチン、どこそこに行きます」だけでは済みません。しっかりと腹を据えて、一生懸命やらないといかん。でも一生懸命すぎてお客さんのことがわからんのではなく、お客さんにも気をつけ、前にも気をつけ、前横、縦横、全部気をつけないといけません。

今みたいに車は多くありませんでしたが、あの時代でもトラックや、いろんなものが通っていましたから、結構大変でした。ある日、私が運転士になって、実地も終わって、張り切って運転したら、私の横にお客さんがいっぱい集まるんです。女の運転士が珍しいと寄ってくるんです。それで、そばで「女の運転士は遅いな」「男の運転士はもっと速いんやけども、どないなっとんねん」て言われます。市電というのは上にポールがございましたから、あれが架線から外れると電気が通らないんです。外れたら、そこで洗濯板みたいなのでポールを引っ張って挟んで、それでまた電車が動くわけです。スピードを出して飛ばすと、ポールが外れて電車が動かなくなってしますから「４０キロではしりなさい」と、指示が出ていたんです。

だから、速い運転士は、ちゃんと決まったことを守らんと飛ばしてるんでしょうね。ここでは４０キロって決まっているんです。それでも、もっと速く走れとか言われるから、停留所から停留所の間が一番長いところまで来た時に、電車を止めて「お客さん、あなたは私の電車に乗って遅いからと何じゃかんじゃと、さっきから黙って聞いているけど、そんなに不満だったら降りて歩いてください」と言いました。別に私がつまみ出したわけじゃないんです。そばにもいっぱいお客さんがいるわけで「お前が要らんこと言うからじゃ、降り降り」と、他のお客さんが降ろしてくださいました。そんなことでお客さんを降ろしたこともあり

ます。それぐらいしないとだめでした。何ぼ言っても聞かん人には、やっぱりヤイトすえてやらんとね。でも、今だったら、クビでしょうね。でも当時は、みんなが祖国一致、一億総動員で一生懸命頑張っているのに、そんな無茶なこと言ったらいけませんよね。

当時は、学校の生徒さんが学徒動員で乗ってこられました。私は「牧田の姉ちゃん」と呼ばれていました。私と同じ年ぐらいの都島工業学校の生徒や大正区の中山製鋼とか久保田鉄鋼とか日本製鉄とか、みなさん動員されて乗ってるんです。その人たちは、乗れない時は歩いて、電車道を歩いて行ったりしている。そんな時代に電車に乗っとって文句を言うたら、そらどうにもならん。時々思い出したらおかしくなって、今になったら笑い話ですけどね。

空襲、そして終戦

そうしている間にも、電車乗りの仕事を、ほんとに生き甲斐のある仕事に感じていました。あの時は、身も心も引き締まって、本当に命懸けで仕事をしていました。だから、何が来ても恐ろしくない、そんな感じでした。しょっちゅう空襲警報が鳴る。毎日「お客さん、待避してください」。運転士と車掌は一番後で待避しなけりゃいかん。「お客さんが第一、電車は死守して守れ」という教育を受けているんです。少々のことがあっても怖いことはないんです。あーっ、今日も生きとった。朝起きたら生きとったと、こういう毎日でした。

昭和１９年の末ごろになってくると、東京や大阪、名古屋、九州に空襲がやってきまして、あっちもこっちも、みんな焦土になってしまったんです。私が大阪で思い出にあるのは、昭和２０年６月３日、大阪にＢ２９が３００機やってきました。朝の９時に警報が出て、９時半に空襲警報。その時は、ちょっと本を読んどったんです。見たら、大阪湾の向こうに８機ぐらい、こっちに向けてやってきてバンバンと一発で私たちの家も事務所も焼かれてしまいました。その時に日紡津守時代にもらったメダルとか写真だとか、いろんな若い時の思い出の宝を詰めたカバンを失ってしまって、青春時代のそういうものは何も残っていません。とにかく私たちも焼け出されてしまって、笠置シズ子さんが卒業された南恩加島国民学校（大阪市大正区）を夏休みの時でしたから事務所に借りて、そこに車を止めて電車道を車庫にしていたんです。

ちょっと余談ですが、皆さんは電車に乗ったりバスに乗ったりなさるでしょう。あの電車が動く時に、お客さんがワツと反るのは運転が下手。そして、バスでもパッととまったりするのも下手なの。運転士の一番上手な運転は、電車に乗ってもバスに乗っても体に振動を与えないこと。スッと行って、スッと止まる。自分自身でそういうことを常に考えていないと、うまくいかないんです。だから、電車に乗ったら、この運転士は下手やな、いつ追突するかわからん。京阪電車に乗って、運転士が倒れたら私が行って替わって運転してあげる。今でも時々そんな思いをしたりすることもあります。

本題に戻りますが、空襲ですべてが焼けましたから、生きているということがどんなに大事かということをつくづく感じました。寝る時も、畳をあげて靴を履いたまま寝ていました。いつ空襲警報が鳴るかわからんからと、そんな毎日でした。

電車の中のうわさを聞くと、もう沖縄にアメリカ軍が上陸し、それから南方のサイパン島では、みんな玉砕したと。そのころ戦争の悪口なんか言うと憲兵隊に連れていかれるんですけど、本心では「戦争なんかやめたらええわ、こんなに空からどんどん弾が降ってくるんやったら負けてもいいから早く終わってほしい」と、率直にそう思ってました。それまではみんな黙っていたけれども、もう「沖縄上陸」ということになってきたら「この戦争はあかんで」、「これは負けるわ」ということを公然と電車の中でも聞くようになりました。

もう日本はだめやと思いはじめていました。鹿児島も沖縄もみんなアメリカ人が来て女、

子どもを殺してしまうと。だから、田舎では女、子どもは全部山の中に逃げとるというような話になってきたんですね。そんな噂が出てきている時に、広島にピカドンという原子爆弾が落ちたでしょ。その日の朝のことをご存知の方はいないでしょうか。私はちょうど市電の運転をしていましたから、空が急に夕闇になってしまって、ちょうど、にわか雨が降る時に空が真っ暗になるような、朝なのにあんなふうになってきました。「どうしたんかな」って思ってたら、夕方になって、その日の朝、原子爆弾が落ちたということを聞きました。広島には大阪で落ちた１トン爆弾の１０倍以上のが落ちたと。１トン爆弾というのは相当大きな爆弾ですけど、それよりもはるかに大きな爆弾が落ちたと聞いてびっくりしました。

それで、これはもう街にいたら皆殺しになってしまうから、田舎に帰らなと思いました。皆殺しされるんやったら、家族と一緒に死んだ方がいいと思っている矢先に「天皇陛下の玉音放送が今日あるから、学校の教室に集まりなさい」といわれ、その放送を聞いたら敗戦です。実は、まず嬉しかったんです。悲しいことはなかった。嬉しかったというのは、空から爆弾や焼夷弾が降ってこないから嬉しかったんです。ああ、今晩からゆっくり寝れると、皆が思ったんじゃないでしょうか。

だから、つくづく戦争は嫌だなと思います。戦争する人があったら私の方が先に殺してやりたいと思うぐらいに戦争は怖い。今まで皆で遊んでいたのに、一瞬にして皆の命を絶ってしまうんです。戦争ほど怖いものはありません。だから、二度と戦争はしたらいかんと、皆さんも思っていらっしゃるでしょう。私も焼夷弾が降ってきて、足にも火傷をして、今でも傷があります。そういう時代に育ったからこそ、勇ましい人間になったのかもしれません。

鹿児島に戻っての暮らし

終戦になったら、とにかくまず田舎に帰りました。ところが帰ったら、何とみんな元気じゃありませんか。「あら、姉ちゃん帰ってきたの」って、「よかったね」って。何じゃらほいと。皆元気で何もなかったんじゃないの。「こんな噂が流れていたんだよ」って言ったら「いやそんなことはないよ、何もないよ」ということでした。噂とデマというのはわかりません。そのころは今みたいにテレビもラジオもないし、本当のことを聞く所がないんです。みんなのことを考えてみたら、噂というのは怖いなと思いました。

それで、田舎に帰って確かめたら、いろいろと町もショボンとしているし、戦争で息子を亡くした家庭やら、まだ帰ってこないところやらいろいろあって。「おばさん、こんちは」って言ったら「あんた元気やったか、生きとったかね」「はい」とこんな状態でした。久しぶりに帰ると田舎も寂しいなと思いました。１３歳の時から大阪に行って、戦争になって、６年ぶりに帰った田舎で、こんな寂しいのかしらんと思って。大きい声で「おばさん、こんにちは」「おじさん、こんにちは」なんて言ってまわりました。何かおもしろいことはないかなと考えて、村の婦人と青年団とありましたから、「何かおもしろいことしようや」ということで、皆で考えて地域対抗の演芸会を計画しました。戦争から帰ってきた兵隊さんもおりました。いろいろやってもらって村中が小学校の講堂に集まって、大変賑わいました。それが済んで道を歩いていると「アヤちゃん、また、あのおもしろいことやってくれんネ」って。「あれはおもしろかったわ」というような、おばさんたちの話を聞いて、やっぱりやってよかったんやなと思いました。

それから、同窓会。そのころは１８歳になったわけです。田舎に帰ると同級生と会いたいじゃありませんか。あの人、生きているかしらん、どうしたかしらんと思ったら、一度、手紙を出してみようと思い、往復ハガキでみんなに出しましたら、大体７０％ぐらい返事が来ました。そのころは、食べるもんがありませんから、米一合ずつ持参です。旅館にそれを出

して、皆でお話をしとる間にご飯を炊いてもらって、皆で食べました。皆、泣いたり笑ったり「生きとってよかったな、よかったな」と、まだ小さい時やから、大人だったらもっと泣くかもしれません。本当に「懐かしくて」「嬉しくて」「皆元気なんだわ」「生きとって良かった」という感じでした。

そんな暮らしをしている間に、時々お嫁の話もきました。「嫁にくれ、嫁にくれ」って、荷物じゃないよね。だけど、私はまだ結婚とか考えていなかったし、父親に相談したら、せっかく大阪から帰ってきたんやから、そんな早く結婚して苦労することない、ゆっくり考えたらいいと言ってくれたんで、特に「嫁に行きたい」とも思ってなく、これはこれでいいと考えていたんです。

そして、私はよっぽど大阪が好きなんですね。大阪に行こうかしらと考えていた時に、鹿児島に南日本新聞というのがあって、そこに日紡貝塚の工場で仕事をしている人の写真が載ったんです。見たら、昔、日紡貝塚に居った時のバレー部のキャプテンなんです。ああ、懐かしいなと思って、よし、この人に日紡貝塚に行きたいと手紙書こうと思って、出したところが「すぐ来なさい、会社がいつでも来ていいと言っています」ということでした。

再び大阪へ　日紡貝塚で組合活動

「すぐ来なさい」ということやから、また喜びいさんで父親にお金をくださいと言いたいところですが、昭和２１年のころは切符は駅で配給だったんです。一週間前に申し込んで買えるんです。お父さんには黙って申し込んで、いよいよ切符をもらいに行かないかんという日が来て、その日に「お金ください」とお願いしました。当然「何しに行くんや」と聞かれます。普通の小遣いの額ではなく、ちょっと大きいから「どうした、何するんや」と問い詰められます。「いや、大阪に行きたい」。「今、帰ってきたのに、行かんでもいい」と言って兄貴なんかも反対しました。「行くと決めたんだから、もう行きます」と、振り切って一人で再び大阪にやってきました。それは、昭和２１年、戦争がすんだ明くる年でした。結局、鹿児島で暮らしたのは一年だけでした。鹿児島で暮らして、それでまた大阪というわけです。

行ったところが今度は日紡貝塚です。後の話ですがバレーボールでオリンピックで勝ったあの日紡です。それで、日紡貝塚に行きますと３０００人あまりの社員さんがいらっしゃいました。社歌もありましたよ。「見せてやりたや何としょう、日紡貝塚より」って、歌も作っているようなところでした。

日本ではそれまでに団体で集まったり、労働組合運動をすることは禁止されていましたが、終戦になって初めて組合運動が解禁になったから、私が日紡貝塚に昭和２１年１１月に行った時には、その年の７月に労働組合ができて組合活動が始まっていました。

まず、組合が取り上げたのは、紡績のいわゆる寄宿舎制度です。当時も女工さんがいっぱいでした。外出も制限されて、食事も食堂の入口で印鑑をついてもらわないと食べられない状態でした。「何をしてんねんやろう」と、誰でも思いますよね。まだそのころは外出も外泊も全部許可制。始業の時間が８時と書いて出して３０分遅れたら、寮母さんからお説教。「どうして遅れたんですか」って。私たちは、そのころ寮母さんを見るとお母さんみたいな年の人たちばっかりやから、びっくりして見てました。「早よ、入りなさい」「はい」。お説教した後は「早よ、帰りなさい」って、「はい」「すいませんでした」という感じで日紡などの紡績では、労働組合ができて寄宿舎の民主化闘争というのが始まっていました。こういう制度というものを、日紡の津守工場のときにも私は経験したことがありますから「これはえらいこっちゃ」と、「これはやらないかん」ということで、そういう民主化運動に徹底してやったわけです。私はいつも発言していました。矛盾は正さなければいかん。私たちは働く権利もあ

るし、自由もあるのに、こんなに「虐げられて耐えるもんか」と。ですから、積極的にその自治会活動という、日本国憲法でいう「自ら治める会。そこで、自らの生活は自らの手でやろう」と。寮母さんたちにいちいちお世話にならんでも、自分たちで自分たちのことができるんですよ、そういうふうに考えて寮母制度を廃止しよう思ったんです。そしたら寮母さんは、みんな女学校卒業が多いわけです。寮母さんたちは怖い顔をして「私たちはどうなるんですか」と詰め寄られました。私が３０００人入る講堂でそんな話をすると、「はい」とか言ってみんな手をあげてね。えらい剣幕で食ってかかられました。私はいつも言っていましたが、寄宿舎を民主化するということは、「みんなが自由な生活をする」ことなんです。今までみたいに寮母さんにいちいち許可を得て外出したり、外泊したり、手紙の検閲を受けたりする必要はないと説明しました。せっかく民主化しようと思っても、寮監制度を廃止しないと私たちの自由はないんです、と訴えました。

当然、寮母さんから「私たちは、どうしてくれるんですか」などと、いろんなことを言われました。当時、私は２５歳で自治会長になりました。３０００人おるところで発言するのは勇気が要りましたけども、根っからのこういう性分ですから、はっきりと答えました。それで、組合の婦人部の活動のほとんどが「宿舎の寮生に自由を与えよ」ということでした。まだその時でも深夜業は続いていました。いろんなことをやっているうちに寮生もだんだんお利口さんになってきて、「寮母さんなんか要らん」という声が大きくなってきました。でも、「やっぱり寮母さんがいないと生活が乱れるからだめだ」ということをおっしゃったのは、年配の方々でした。

それで、私に「あんたは若いからそんなことを言うけれども、みんなおかしくなったらどうなるんや」と言われます。「いや、そんなことはないはずです。今の方がおかしい」ということで、随分議論もしました。紡績の労働組合の組合員の８５％は女の子なんだから、このことをしっかりとしてやらないで何が「労働組合」で、何が「労働者を守る」のかということです。だから寮母さんも会社をクビにするんじゃなくて、職場転換をしてもらう。寮母さんが入口の一号室を占領しとったら、みんな自分の部屋に行くまで寮母さんに気遣いをしながら行かんといかん。だから、そういうようなことはアカン。

ご飯なんかも、私が行った時でも食堂の入口で、印鑑をつかないと入れてくれないんです。「こんな美味しくもないご飯を二度食べる人はいないから、こんな印鑑なんかつくのはやめたらいい」と申し上げました。

そんなようなことで食事の改良にも取り組みました。そのころの刑務所の食事の費用が、確か２５円でした。紡績の食事の費用もそれぐらいの値段。「私たちは刑務所並ですか、刑務所と同じじゃありませんか」と、そんなことを言って会社から嫌がられることもありました。黙っていちゃわからないもんね。何ぼ賢くても、黙っていちゃわからなし、言わんといかん。間違ったことを言ったらいけないけど、正しいことは主張せないかん。そういう点で会社もようやく「しょうがないな」ということで話を聞いてくれるようになってきました。それで、しまいに「お櫃（ひつ）制にしてください」とお願いをしました。ご飯を８人ぐらいで一緒に食べると、たくさん食べたお嬢さんもあれば、ちょっとしか進まない人もありました。食の進まない人は、それを持っていって捨てるのに、食べたい人は欲しそうに見てる。そういうのは見ていたら辛いですよ。これは困るから「お櫃制にしてください」と言って、その時には紡績で導入しようとしたのは、関西でただ一社だけでした。視察には私も付いていきました。日本生産性本部のお世話で会社の偉い人と私と労働組合の代表者と大阪から東京まで見学に歩きました。

それで、関西で一番最初のお櫃制を日紡貝塚が始めました。だから、他の会社も遅ればせ

ながらも、たしか、昭和２６年からそういう運動が始まりました。だから、ひとつのことでも大変なこと。

それから、もう一つは、深夜業というのがあります。それを撤廃しようということで、これには１０年ぐらいかかりました。朝の早くから晩の１０時、１１時まで会社におるということは大変なことです。二交替制ではありますけれども、若いお嬢さんたちは朝４時に起きてご飯を食べて、昼までもちませんよ。だから、そのたった３０分、片番ずつしたら１５分ずつですよ、それを勝ち取るために５日間、無期限ストライキをやりました。昭和２９年ごろでしたね。ストライキやっても、まだ紡績会社は反対して、「３０分短縮したらお金を引きますよ」と言います。こんな言うてたから、それを「引かない」と言うまでやろうということでやりました。

それから、泉南の衣料品の会社で、「深夜業撤廃」というので、女の人ばっかりの組合員で、高野山のお寺に５日間立て籠もっておりました。私も陣中見舞いに行きました。会社が絶対深夜業をやめるというまでは会社に帰らないと訴えました。それで会社も、いろいろ新聞に載ったりするから仕方なく「深夜業は撤廃する」ということで、たった１５分の話ですが、そのときに初めて紡績で７時間４５分という労働時間を勝ち取ったんです。

その他に「生理休暇」とか「産後の休暇」とか「出産手当」も、女の人の戦いといいますか、すべてに取り組んでいったんです。なぜかと言えば、日本の女の人で一番働くのは紡績です。紡績の女子労働者のいろんな労働条件が良くなれば、日本や世界の女の人が幸せになるんです。だから、国会議員になるよりも、一つ一つを積み重ねていって、それをみんな中央で話し合ったり、いろんなことを考え行動する。そういう改善ができ上がっていく。

近江絹糸の人権争議だってひどいことをしたから、大きな国際問題にもなり、外国の人からも陣中見舞いもいただきました。なぜかと言えば、新入生歓迎式の時に、出口の小さい講堂に閉じ込めて映画会をやっていたら、火が出て２３人ぐらい亡くなり、２２人火傷で重軽傷を負いました。それまで近江絹糸は、少し遅れていて民主化が進まない状況でした。日本国中の繊維で働く人たちが近江絹糸を応援しました。それだ、この事件をきっかけに民主化が進むことになりました。今は近江絹糸も良くなりました。そういう細かい作業なんか、殆ど女の人は昔から辛い仕事してきた職場でした。そして、またそこにたくさん参画している人は、若い女子労働者です。そういう人たちのために組合が頑張らなくて、そして女の人も頑張らなくてはどうしますか。世の中は良くなりませんね。現代でも、そういうことがたくさんあると思います。

それで、紡績というのは、良かれ悪しかれしょっちゅう希望退社、クビ切り、そういうのがあるんです。ちょっと会社の調子が良くなったら人をたくさん連れてきて、ちょっとだめだったら、パッと荷物みたいにクビ切ったりするんです。だから、みんな耐えられなくて、しっかりと労働組合も守ってやらないかん。どうしても「帰れ」と言うなら給料くださいと。２ヵ月間帰っても８０％を保障してくださいと。それなら帰ってやろうと。こういうことで紡績の操短（商業短縮）いうのが行われました。

そういう状況が、いつもあるんです。昭和２５年の末ごろから朝鮮戦争が始まったでしょ。あの時も、急に人をいっぱい増やされて一つの部屋に１０人しか入れないのに１３人くらい入れて、全部で３千５～６００人にもなりました。寝具も隣と隣が重なって寝るわけですから、「何とかしてください」と言っても「臨時のことだから」と聞いてくれない。私は、岸和田の労働基準監督署に行ったんです。「実は日紡では、こういうことがありますから、一度、監督署から何とか言ってくれませんか」と言ったら、監督署も頼りない。「大の日紡さんが、そんなことはないでしょう」と言われるんです。あるから言っているんですよね。「会社に帰

って、よく相談してください」と言われて、「そうですか、ほんならまた帰って言いますわ」と。「こんな頼りない監督署なんて、税金払っとるのに無いほうがええんちゃうかな」と思いながら、てくてく歩いて岸和田から帰ったことがあります。まあ、昔の歴史をひも解いてみると、すべて経営者と役所は一緒になってるから、役所が休みになったら遊びに来て、ご馳走食べて帰る人もありますから。だから、こんなん言うたって、しゃあないわ。自分たちで言わんといかん、と。

全繊同盟に訴える

一生懸命頑張っていたら、朝鮮戦争が１年半ぐらいで、あっという間に終わって。今度は「辞めてください」と言われる。早速、人員整理で「昔からおる１５年以上の女の人は辞めてください」「３０歳以上は辞めてください」と言われました。ほんとは、紡績ではそういう人たちが一番貢献してきた人なんです。戦前、戦中、戦後、見返り物資を作ってきたのに、不景気になると、そういう人たちが犠牲になってしまう。４１年の５月に希望退社をやったんです。それで掲示板を良く見てみたら、３０歳以上の人は、みんな辞めないかんように書いてあるから、カッカきて会社に行きました。「あの掲示板はなんですか！」と。「まるで全部辞めないかんように受け取れるじゃありまでんか」と。「誰があんなもん書いて貼ったんですか」と言ったら「ちょっと待ってください」と。

それで今度、食堂に行った時に、会社の掲示板があるから見たんです。会社から貼り紙を取りにきて「えらいすんまへんでした。誤解されるような文書にして」。「何が誤解されるような文書や！」と。「辞めてください、辞めてください」という意味で書いたんだと思いますよ。

しばらくたって組合にも行きました。「どうなってんですか」と。みんなには黙って、今まで何も言わないでおって、急に会社は一方的に書き出してるけど。日紡にも全国で１０何社ありました。その１０何社が全部労働組合を組織して固まったのが、日紡本部の労働組合です。その上に、まだ日本全国の繊維産業で集まったのが、東洋紡とかカネボウとか全部ありますが、そういう組合がまとまったのが全繊同盟（全国繊維産業労働組合同盟）です。繊維を作る会社の組合は、全部、全繊同盟に結集する。こういうふうになっているんです。

組合では「上の方で決めたから、どうにもならん」なんてね、「何ちゅうこと言うんですか」と思いました。せめて、「こういう人員整理の話があるけど」というぐらいは言ったらいいじゃありませんか。「何を考えているんですか、どうしてくれるんですか」と詰め寄ると、黙ってしまうんです。こんな人に言ってもどうにもならんと思いました。私たちは上部団体にお金払ってるんですもんね。「これは一発、言わなあかん」と思って。全繊同盟本部に「実は、コウコウで日紡が、こういうようなクビ切りをするんです」と言ってみました。すると、全繊同盟は、さすがに繊維系企業組合の一番上の組合です。「日紡の希望退社は認められません。即刻中止をしなさい」という通告が来たんです。こんな通告が来たもんですから日紡の本部はびっくりして、支部・組合は執行委員会を開き、「誰が言うたか」と犯人探しです。私は臆することもなく「はい、私が言いました。言って何が悪いんですか」と言ったの。「ここの組合では力がなくてできなかったら、上の上部団体に助けを求めるのは当たり前でしょう、それがどうしたんです」「それならいったいどうしてくれるんです」って言ったら、その役員さんは黙ってね。そんなことをしている間にも職場で「責任者」「３０歳以上」「１５年勤続」の人に、「あんた、辞めたらどうや」って、いわゆる肩たたきを始めました。

組合員さんからは「私も辞めても行く所ありません」「紡績しか知らないから」ってみんな泣くんです。泣くしかないでしょ。「ちょっと牧田さん、話があるんです」と相談にみえられ

る方がたくさんいらっしゃいました。「私、行くとこありませんから辞めたくありません」って言ったらよかったんやと言うたら、「そんなこと言うても、今度、小さい中小企業を世話してあげるからと言われたんです」。なんてことか、あっちもこっちも、夜中まで、そういう相談が続くんです。腹が立つじゃありませんか。これは黙っておられへん。だから組合幹部に「私は上のほうに言うたんや。上のほうに言うたのが何が悪い」と返しました。「人員整理を決める前に、なぜ、こういうことがあると組合員に伝えてくれないのか。私も組合の執行委員もしとるんだから、一言でも聞かせてくれたら良かったんじゃないですか」。また「組合の幹部っていうのは、私たちが組合費払って、それで給料もらっている人たちでしょう。みんなが困っとる時に助ける、みんな一人じゃ何もできないから、みんなが団結していろんな問題にぶち当たっていこうという方針やないですか。それを今になって「上が決めたから」っていうようなことではどうにもならん」ということを随分言いました。そしたら、「牧田君、君をブン殴ったるで」という人まででてきました。私は「アラ、どうぞ」と言い返しました。

組合活動に愛想つかし、でも、再び枚方で組合づくり

そんなこともあって「言うたことは言うたんだから仕方がないでしょう。もう私も、こんなとこ愛想がつきたから、組合運動なんかもう辞めますわ、会社も辞めます。組合というものは、もっと、心ある組合なのかしらと思っていました。」と組合にも、会社にも話しました。それから、後日にまた希望退社の掲示が貼りだされましたが、そのころはもう職場の中で「辞めたら、辞めたら」の嫌味を、いっぱいみんな言われている状況です。「辞めたら」って言われたら、「いや、まだ居りますわ」ってなかなか言えないわけですよ。結局、その時は３８０人ぐらいの人たちが辞めていくことになりました。私も、みんなを見送ってから辞めようと思って、辞職願を出すことにしました。

それで、寮生たちがみんな出て行かれるその日まで、私は頑張っていました。みんなを大阪駅やバスターミナルへ見送って、だいたい片付いたところで、「さて、これから私はここを辞めて、どこに行くのかしら」とちょっと不安になってきました。そのころは、車の運転の免許証でもとらんといかんと思い、堺市の自動車教習所に電話をかけて申し込んだら、「５名を世話してくれたら、毎日タクシーで送り迎えします」ということで、早速、友達５人と毎日夕方になったら教習所に行って、一ヵ月で仮免許を取って、門真の古川橋まで行って免許証をもらってきました。それまでは、自動車の免許も取りに行く暇もなくて、こういう機会にようやく免許を取ったんです。

それで、とにかく免許証も取ったし「これから、どうしようか」と思っていたら、全繊同盟から、いろいろと仕事のお話もありました。他のところからも「あそこの代議士の事務所に行かんか」という話もいただきました。「もうこんな組合運動は絶対にしない」と愛想もつかしたと考えていただけに、なかなかその話に乗れなかったんです。全繊同盟の先輩の人たちは、真面目に組合活動を続けておられると、私はかねがね本部の職員のみなさんや、あるいは婦人部長とかそういう方たちを尊敬しておりました。「牧ちゃん、短気を起こして辞めるのもいいけど、いっぺん全繊同盟に来て、今までの経験を生かして一緒にやりましょう」「男の人に負けんように頑張ろうよ」とお誘いいただいたんです。それでも、組合役員というのは、ほとんどが男の人だしね。特に私がこれまでかかわってたのは女の子たちばっかりだから、男の人たちの労働条件とか賃金のことも、考えないといけないというのは本当に大変なことなんだって。今考えたら「さもありなん」と思うんですけど、その時はもう「若気の至り」で、一方的に憤慨していましたから。

そんなことがあって、全繊同盟からのお誘いを「私は大阪が好きだから、大阪から離れた

くないので、嫌や、嫌や」と全部断っていたんです。そうすると「大阪でいけるように探しているから」と話がありました。「枚方の既製服団地に、紳士服を作る企業団地ができたから、あそこに行って最初から組合作りをしてくれたらどうか」ということでした。あそこは、大体７０００人の町ができるということだったんです。私が来た時には、社宅も含めて４０００人ぐらいおられました。「７０００人もの人が働き、住んでいる町やから、これから牧ちゃんが、自分の気に入ったようにいろいろできるんじゃないの。だから枚方に行って、組合作りから頑張ってやったらどう」という話だったんです。

私は、それまでにいろんなことを経験してきて、もう組合活動はしたくないと思っていたけども、新しい所なら私の考えも入れて、すばらしい組合を作ることが出来るかもしれないと考えなおしました。自分が嫌だった「希望退社」を阻止するなんてのは一人の気持ちではできないけれども、組合として、人間が進むべき道、正しいことを信念をもって行動することができるかもしれない。このことなら、みんなにしっかり教えることもできるし、自分の気持ちも考えも入れてできるんじゃないかと、むしろ希望に燃えてきました。それで「やっぱり行かしてもらいます。よろしくお願いします」と返事しました。

そして、実際に行ってみると７、８社だと思って行ってみたら、企業団地で３０数社ありました。できたばかりの新しい団地で、組合の組織も何にもありません。アパートを借りて住んで、そこから毎日自転車に乗って、既製服団地の周りをずっと毎日３回ぐらい回りました。だんだん既製服団地というのがわかったから。今度は自転車を降りて、会社の休憩時間を利用したり、夕方、みんながお帰りになる時間に行って「もしもし、どちらからお見えですか」と声をかけてまわりました。「わたし、島根県から」「ああ、そう、島根県ってどういうところですか」「お宅の会社には組合ありますか」って聞くと、たいてい「いいえ」って答えです。「ちょっと話しさせていただいてよろしいですか」ってことから話したり、会社の休憩時間には社員さんは会社の周りで休憩していらっしゃるから「おたく労働組合どうですか」とか、「労働組合というものは、一人の力では何もできないから、賃金とか労働条件をみんなで良くしていくということですよ」とか、そういう話をしてまわりました。１社、２社と少しずついろんなお話ができてきました。すると、会社の社長さんはびっくりですよ。すぐに私は呼ばれました。「牧田さん、あんたワシのとこに来て労働組合作って、ワシとこの会社を潰す気かね」って。私も負けずに「そんなこと、おっしゃらないでください」って返しました。そのうち「全繊同盟の牧田が来たら、うちの会社は玄関から入れたらアカン」というようなことまでなりました。でも、私は「ああそうですか」って帰りませんよ。「工場長さんいらっしゃいますか」って訪ねて行くんです。まず「職場の中を案内してください」とお願いするんです。「工場長に入れんように言われたんですけど、どうしよう」と困った様子です。それを見て「あなたはここにいなさい」といって直接工場長さんのところへ押しかけます。工場長さんに挨拶して「私が来たら入れるなとおっしゃったそうですが、それはどういう意味ですか」と詰め寄るんです。「ぼ、ぼ、僕は言うてない」ってあわてるんですよ。そんなこともありました。

でも、けっして悪いことをしているわけじゃないのに、なんで私が行ったら「来たらいかん」ていわれるんですか。「労働組合のこと言うから来んほうがええ」「入れるな」ということなんですね。

時には私も働いている人に呼び出されて、場所は今、外科医院が建っているところでしょうか、松や竹が生えたりしてたんです。そこに呼び出されて、働いている人が会社のいろんなことを教えてくださる。昼の休憩時間にみんな集まって、労働組組合結成の準備をしたりしました。

それで、女の人も、男の人も、まず労働組合ができたら、みんなで勉強しようということになりました。組合とはどんな役割があるのか、執行委員はどうなのか、青年部、婦人部はどうなのかということで、勉強することになりました。学校の勉強を教えるんじゃないから、いろいろと工夫しながらやっていたら、やっぱり、近代的な感覚をみなさん持っていらっしゃるから、飲み込みは早いです。労働組合がやってることを新聞やテレビでご存知なんだから、飲み込みは早かったです。そこで全繊同盟加盟組合の企業が、京都や箕面の紅葉のあるところや、あっちこっちに保養所を持っていたので、そこを無料でお借りして、２～３０人で研修やるんです。

また、そこには専門の組合の幹部の人を講師として呼んで、一泊や二泊でしっかりと勉強してもらいます。次は若い人たちに「生活学校」です。ここにも専門の先生をお願いして、女の子たちが、男に騙されたらいかんというようなことをしっかり教えていただきます。それこそ歳の若い人たちばかりですから、避妊することはどんなことだとか、先生にテープまで持ってきてもらって教えていただきました。やっぱり、そういうことは若いお嬢さんたちに、間違ったら大変だということをしっかりと教えないといかんということで取り組みました。

既製服団地で勤める人は、通勤する人たちも多いですし、寮に住む人たちも多いわけです。男性の職場の人たちも、あちこちの組合と交流もしましょうと、京都でみんな交流会を開いたりもしました。そうすると、おしゃべりしたりする中で仲良くなって結婚した人もありました。そんな人ができてくると、会社から「牧田さん、あれはなんですか」、「あんまり交流会はせん方がいい」と言われだすんです。「大事な娘を預かっとるのにな、結婚する言うて困るよ」ということです。「そんなん、組合活動を通じて仲間同志が結婚するのもいいじゃありませんか。なんでそんなこと困るんですか」と返しますと、「そんなことをおっしゃるのはおたくだけですよ」って言うんで「今どき、そんなこと言っていたら人が笑いますよ」ってまた返します。「いやもう、あんまりそんなことしてもらうとな、うちの会社の子どもだけが他に取られてしまう」ということなんですね。「取られてしまう」って荷物じゃないですよね。みんなが愛し、愛されて結婚するのは良いことなんです。だからといって、あんまり自由にしていると、私みたいに、いつまでも嫁にいかんような女もできるの。だからね、自分自身で好きな時に出て行って、みんなと楽しく遊ぶというのは大事なことですよ。

そんなことで粘り強くいろいろやっていたら、とうとう「牧田ハンにはかないまへんわ」ということになりました。もう諦めなさい、若い女の人には、やはり男の人がいる所のほうが良いんですよ。楽しく遊べていいじゃないですか。とにかく、既製服団地の組合も一人前に立派に育ちました。他の労働組合は長い歴史があって、今の水準ができたけど、既製服団地は他の組合の水準ができているところに乗っかって、伸びてきました。他は１０年かかったことでも、ここは３年位で実績をだしました。

そんなことをしているうちに、ある新聞社が「既製服団地は立派な組合で、日本の繊維の中では…」って記事にしたいから掲載させてくださいと依頼がありました。私はお断りしました。なぜかと言いますと、どこの組合長でも新聞に載れば、会社が小さいのに、また会社にいじめられることにもなるからです。「何もそんなの手柄ではないのでやめてください」と言って帰ってもらいました。

そうすると今度は本部から「なんで断ったか」と言ってきましたが、実際は中小企業ではそういうことも気遣いしてやらんといかんのです。一人の組合長だけを取り上げても、他にも３０何社があるんだから、他の会社もいろいろと都合もあるから「載せんほうが良い」と進言しました。

市会議員という仕事と結婚

そんなことで、とにかく既製服団地も立派になりました。「もう私のすることもないわ」って言っていました。既製服団地に労働組合が出来た時から、私は事務局長させてもらい、それから、連合会長もさせてもらいました。当時は長尾谷町の社宅に住んでいて、ゼンセン本部の組織部長も来てくださいました。既製服の労働組合の運動は晩ですから、「牧ちゃん、昼間に仕事がないやろう」と組織部長はおっしゃるんです。「今まで嫁にも行かんと、社宅も、地域も区長や婦人会も、まとめて面倒みてるんやったら、市会議員という仕事と結婚したらどうや」という話になったんです。私も、最初は笑って聞き流していたんですけど、半年ぐらい後で「牧ちゃん、やっぱり君にでてくれということで決まったから」って連絡が入りました。私も軽く「はいそうですか、ほな、しましょうか」と、こういう気持ちで引き受けたんです。私は大学も出てないけども、人並みなことはみんな常識でもっているつもりなんで、専門的なことであればできんこともたくさんあるけど、何とかなるだろうとも思いました。枚方の市会議員の人たちが全部大学出かといえばそうでもない。私ら、昭和４６年（当選）ですから、同じ年代の先輩の方もたくさんいらっしゃるでしょうし、お金持ちの方もたくさんいらっしゃる。「あのおじさんたちがするんやったら、私も絶対負けないわ」と本当にそんな気持ちでした。

それで、それをお受けして、既製服団地の会社の皆さんや、第一メリヤスに働く同業者の皆さんが、枚方に住んでいるお友達を１５，０００人ほど紹介していただきました。そのほかにも、友達が「私の親戚のおじが、おばが…」ということで、初当選した時は、３，５００票ぐらいの票がありました。それで、上から１５番目でした。その時は「５当３落」と言って、５００万円使ったら当選、３００万円なら落選ということでした。私には当然そんなお金はありませんでしたが、皆さんの力で、市会議員に当選させていただいたんです。

「**市会議員**」っていっても、みんな『自由貧乏』ですよ。外に出れば「あ、先生」とおっしゃっていただくけれど、本当は先生というほどのものじゃないんです。家に帰れば「おじさん、おばさん」で済むわけですから。とにかく市会議員になったからには「しっかりやらないといかん」「誰にも負けんとやらないかん」と思って頑張りました。私は「誰に比べてダメなんですか」というくらいの気持ちでやりました。私たちの選挙の時には立候補者が４０人でした。３６人しか市会議員になれないんです。現在は定数が３４人になっていますけどね。選挙の時から私は「絶対通る」と思って、信念をもって頑張ったんです。もちろんそれは、たくさんの人が支えてくださるからで、通る前から「必ず通る、通ったらやるで、頑張るで」と、張り切っていたんです。

当選させていただいてから、第一期目は、市民病院の食事のことについて取り組みました。病人食というのは、やっぱり見た目に美しくないといけません。食事というのは人間の五感で食べるもんですから。だから、入院患者の人においしいご飯と、温かい料理を出す。冷たいのはダメで、食器は全部瀬戸物にしてということを取り上げ、やかましく言って、全部取り替えてもらいました。だから、今は温食を出してくださっているでしょ。鍋の大きいのを用意して、温かい食事を入院患者に出してくださっているんです。そういうことも大事なことなんです。何もできない私が、なぜ食事のことを取り上げたかと言ったら、紡績にいる時には、集団喫食の問題、みんなの食事のことを、しょっちゅうやっていたからです。だから病人食やったら「やれる」と、真っ先に取りかかったんです。そうしているうちにいろいろと勉強もできます。そんなことも一つの思い出です。その時は、看護婦（師）さんが、宿舎の改善についておっしゃったんで、役所の係員も同行して、寮の改善等もお願いしました。自分のできないことをするのは大変ですけど、できることからやることはたやすいこと。だ

からできることから、手がけたらいいと思います。

二期目には、監査委員を２年ほどしました。その時はちょうど北牧市長さんのころです。学校がどんどん建っている頃でしてね。何に気をつけたかといったら、やっぱり手抜き工事です。学校は、いざという時にみんなの避難場所になるから、手抜き工事をしたらいかんというのが大命題でした。監査委員ということで、いつも手巻きのメジャーを持って行っていました。学校の壁は大体２０センチ必要なんです。ところが、実際測ると１６センチぐらいしかないんです。これならさらに４センチのコンクリートを張らないといかんでしょ。そんな４センチもコンクリートを張るはずはない。上だけ塗ってそれで終わりにする。そうするとコンクリートがたくさん余るので業者の儲けです。でも、そんなんじゃすぐ壊れるじゃありませんか。そういうことに気が付いたんで、北牧市長と助役さんを入れて、臨時の監査委員会を開いてもらい、監査の結果を報告しました。「これは不良建築ではないですか」「どうしてくれますか」と指摘しました。それで、途中で工事が中止になり「そこをやり直せ」ということになって、後でその建築業者に恨まれました。「牧田さんが要らんことを言った。半年間の入札禁止となったから６億円も損をした」と。でもそれは決してウソでも大げさごとでもなく、現場には市長さんも連れていって、みんなで確認したんですから間違いのないことです。

そういうことが、目に見えないところで行われている。そういうのは、きちっと見なくちゃいかん。専門家だけだったら、馴れ合いになるじゃありませんか。私たちは議会から選出された監査委員だから、そういうことに気をつけました。

三期目は、市の職員の勤務時間の問題にも取り組みました。当市の職員の勤務時間は一日７時間で、本当に恵まれていました。朝の９時から夕方５時までしか働かないんですよ。途中で１時間食事とか、また、１０時や３時にも１５分の休憩とか、そんなことは一般の民間ではありません。

また、役所に行ったら職員さんたちが、みんなカウンターに座っているじゃないですか。窓口手当てが３５０円。「何が窓口手当なんよ」って。そしたら窓口で仕事している人たち全部に事務手当てを付けないかんて。他の市でも問題になったでしょ。

学校の給食調理場でも、調理をして本当に危険な仕事の人は危険手当が付いて当たり前ですけど、調べたら全部の人に危険手当が付いている。１ヵ月手当を溜めたならなんぼになるということで、そんな手当問題も追及しました。そのころは私たちが先頭に立って言ったほうです。職員には恨まれる面もあったでしょうけど、やっぱり、税金を払っている人がしんどい思いをして、税金で食べている人、市民サービスをしないといけない人が、そんなに優遇されているのはどうかなと思って活動してました。

役所では、今でこそ、人材センターからの社員が受付にいらっしゃるでしょう。あんなところに、３０万円も４０万円ももらう職員が座っていなくても、人材センターからよこせば、２人分の給料が出るわけですよ。そういうことを改めなければいけないですね。

いろんなことを言いまして、あの牧田はうるさいだけじゃない。やっぱり、大事な時には、議員や役所の人も助けることもあるし、これを言ったら大変なことになると思うことでも、グッとこらえて、相手の立場を尊重してあげる。なんでもかんでも言ったらええちゅうもんじゃない。なんでも「これしてください。あれしてくだし」というのは楽でいいけど、財布の中を見たら金もないのに、そんなことできるわけもない。そんな時はやっぱり、「できない」と言ってくださいといいました。それを「ああでもない」「こうでもない」と言ってごまかしているから、何時間もつまらん議論をせんといかんのです。そんなことは早くやめて、できんならできんと、はっきり言ったらいいじゃありませんか。時には可哀そうにと思って優し

く、あるいは、人にものを頼むのでも「ここがこうだから、直してくれませんか」と、こういうふうに頼むんです。人に頼まれたら三日以内に返事をしなさいと、私が既製服団地の組合でみんな言ってきたことです。だから、私は市会議員になっても自分が頼まれたことは「三日以内に返事をする」ことを原則としておりました。三日以内じゃ解決できない問題もたくさんあります。だけども、三日たったら、１回ぐらいは役所にいって「こんなことがあるけど、どうですか」「できないですか、できるんですか」それとも「これはどういうことになっているんですか」と、これくらいは役所に聞けるでしょ。聞いたらそのことを頼まれた人に「今こうなのよ、ああなのよ。だから、今、検討してもらってる」と返事をしてあげることは簡単なことです。悩み事をお菓子を持っていって頼んだのに「何もあの人、言うてくれへん」と言うようなことも、よく私たちは聞きます。だからけっして菓子をもらったらだめなんです。もし人が、私に何かお願いにきて、菓子折りを持ってきたとしましょうか。そしてそれがダメな話になってごらんなさい。菓子は食べちゃったわ、又その次、選挙せんといかんわ。菓子をもらって「何もしてあげられず、ごめんなさい」なんてこといえないでしょ。だから、頼みに来る時は困っていらっしゃるんだから、絶対に物を持って来ないでください。もし、本当にいただくんやったら、もらった傍で開けないと、例えば１万円でも入っとたら贈収賄ですよ。「助かったから感謝の意味で持ってきました」と私に持ってくるんだったら「もっと持って行かんならん所があるはずやから、そっちへ持って行きなさい」といいます。そういうのが大事なんです。

大体業者というのは、折に触れて色々誘惑するんです。そして「いっぺん、夕食などどうだ」とね。ついつい、夕方になって腹が減って、ちょっとスケベ根性を出して行こうかなと思ったら、それがもう「運の尽き」やね。何回も何回もそんなことになって断れなくなって、そんなことをしてもらっていい気になっとったら、結局、自分も辞めなくちゃいかん。だから、政治家は、身の潔白を一番大事にしないといかんのです。政治家は清潔でなければいかん。悪いスケベ根性を起こしたら、絶対にいかんのです。

いろんなことする人でも、お金が欲しくない人はないです。でもこれは本当に、いただいて当たり前なのかどうかをよく考えないといけません。これで、自分の一生を台無しにしてもいいのかを、もう一度考えんといかんです。１円もらっても１千万もらっても、もらったことはもらったのやから、許されない。

それから、嘘をつかない。嘘をつく政治家はだめです。なんでかというと、相談に行っても、政治家はどこにも確かめずに「あれはちょっと…」と言うぐらいにして、饅頭を食べた後になって、また訪ねていくと「ああ、あの件は無理でんな」。今頃になってなんですか、無理なことは最初からわかっているのにと思います。

大体、皆さんのご相談というのは、日常生活のこととか、医療費や生活保護とかいろんなことをおっしゃるんです。そんな相談は、議員を何年もしてたら「これはどうやなあ」ということが大体わかるんです。担当者と議論をしょっちゅうしてるから。だけど、私みたいに「それはね奥さん、だめなんよ。実はこうこうでね、それは絶対通らんなあ、こまったな」はっきり言うと、私の事務所の人たちが、よく言っていました。「牧田さん、せっかく相談して来とるのに、あんまりすぐ『できん』と言いなはんな。もう少し時間をかけてから『ダメやった』って言ってやったらどうやろか。可哀想過ぎるじゃないの」と言っていました。私は「できんことはできんと早めに言うてやった方が相手もいいんじゃないの」と。「牧田さんに頼んだけど、２日も３日も『あれどうなったかしら』なんて思わしてるよりも、こういう理由でできないということを、はっきり言ってあげた方がよいと思うけど」と返しました。それはずっと辞めるまで私の後援会の人たちとの議論でした。三期目になったらそういう事

で、枚方市のいろんな問題も積極的にとりあげて、やかましく言って他の議員さんからも嫌がられた面もあります。「牧田ハン、またクビ切りでっか」とか、「何しはりまんねん」とか言われてました。結局、間違ったことをしたことではないんです。誰でも人間だから、言うには勇気がいるんです。

それで、枚方の給料なんかでも、一般の労働者と、あるいは市民生活と比較して、どうなのかという事も大事なことです。「あの子ばっかりたくさんもらっとって」と税金を払っている人が「反対」と言うようなことではだめなの。だからそういう点で、枚方市も昔と比べるとずいぶんシビアになってきました。市職員の給料も、ラスパイレス指数と言って、昔は国家公務員が１００だったら、枚方が１４０で、月額２，３万円も多くもらっていることがありました。国家公務員が１０万円だったら、枚方は１４万円もらっていたこともあり、全国的に地方自治体はそういうのがあるんです。

枚方市初の女性議長誕生

最後に市議会の議長に選出されて、新聞社やテレビ局がやってきました。そしたら男の人から「牧田はん、あんたは女やからええなあ」。女が議長になると新聞社やテレビ局が来るけど、男が議長になったって誰も来てくれへんということです。「議長、議場での写真を撮らせてください」とか要望されましたが、女だからアホみたい、ホヤホヤしとったらいかんと。そんな時こそ人並みに、慎ましやかにしとかないかんと思い、議会事務局長にお願いしました。「局長、いろんな人が来ても、あんまりヤイヤイしないでください。でないと私が困ります」と。みんな一緒だから、女だからって特別扱いをしてもらいたくないと思いました。だから報道局の方は、みんな帰ってもらいました。それでも、どこかのテレビ局が撮っていったんでしょう。あくる日、あちこちから電話がかかってきました。私の友達も「牧田さん、おめでとう」って。何のことかなと思いましたら「テレビで知った」ってことです。「牧田さん、生きてるか死んでるか分らなかったけれども、テレビで初めて知った」ということです。皆さんに喜んでいただきました。「私はここにおるから、また何かあったら来てください」ってことで、いろんなことを申し上げました。

「話す時間が、明日まであっても足りない」

私は小さい時からおてんば娘で大きくなったんです。小学校６年で卒業して、日紡津守工場に入りました。そこで２年半して閉鎖になった、電車の車掌になってから運転手になって、戦争で焼け、、「みんな殺される」っていうから慌てて鹿児島に帰りましたら、大阪の噂はデマで、みんな大丈夫でした。久しぶりに６年ぶりに同級生やらと、演芸会を開いて、大笑いしたり、楽しんだり泣いたりしました。また再び、日紡貝塚に参りまして、それから１９年働きました。約２０年のうちで１７年間、寮の自治会長を専従でさせていただき、毎年３月に選挙があり、その選挙で３千あまりの票を入れてもらったら、やらんわけにいけないでしょう。がんばろうと思って張り切っていたんです。

それで、またクビ切りがあって、嫌になって、もう組合なんてやりたくないと思っている時に、全繊同盟から話があって、「大阪が好きだから」と言ったら、ほんなら「枚方に行きなさい」ということで、枚方にやってもらい、そこで一生懸命また組合が出来るように頑張って組合の事務局長や、会長をやらしてもらいました。

もう、私も役割もなくなったからと思ったら、今度は「枚方の市会議員という仕事と結婚したらどうか」と呼びかけがあって、市会議員をさせていただくことになりました。一にも二にも、皆さんの温かいご支援とご協力、そして私も真心込めて、精一杯頑張ってきた。こ

のことだけは、言っても差し支えないんじゃないでしょうか。

最後に、私の先輩の赤松常子先生が「一人は万人のために、万人は一人のために、生涯かけて頑張りなさい」とおっしゃった。赤松先生も戦後、参議院などでいろいろな活動をなさった。この赤松先生は与謝野鉄幹の兄さんの娘さんなんです。従って与謝野鉄幹が叔父さん、晶子さんは叔母さんになるんです。その先生が私に教えてくださいました。

いずれにしても皆さん、つたない、しょうもない話を聞いていただき、ありがとうございます。もう８１歳にもなり、皆様の前で話すこともないと思っていましたが、枚方の市民の皆さん、そして今日お集まりの皆さん方の特別なご配慮によって、こういう機会をお与えくださいまして、本当にありがとうございます。終生、忘れません。これからもまた、どんどん頑張ろうと思います。ありがとうございます。

～完～

牧田アヤ子さんのプロフィール

紡績会社（日紡津守）を経て、戦時中は大阪市交通局に勤務。
戦争末期には電車の運転手も経験。
再度、紡績会社（日紡－ユニチカ－貝塚）で約 20 年勤めた後、
既製服団地で労働組合づくりに取り組む。
枚方市議会に当選し、
1984 年には、枚方市では女性としてはじめて議長に選出される。